HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	知識社会学に関する学説・理論的研究 : K. マンハイムを中心に［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	小田, 和正
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(経済学)
Dissertation Number	甲第14167号
Issue Date	2020-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79354
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kazumasa_Oda_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

様式９

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経済学）　　氏名：小田和正

審査委員　主査　特任教授　佐々木憲介
副査　教授　橋本努
副査　准教授　斉藤尚

学位論文題名

知識社会学に関する学説・理論的研究――K. マンハイムを中心に――

本論文は、カール・マンハイムの社会科学方法論および理論を、その後のドイツにおける知識社会学の展開を踏まえて、再検討したものである。その内容は、既存の批判を乗りこえて、マンハイムの達成を有意義な仕方で定位するものであり、またその中核的な部分を理論的に発展させることに成功している。審査委員は全員一致で、本論文が博士（経済学）の学位授与に値するものと認めた。

マンハイムの学問的影響力は大きかったが、彼は必ずしも自分の理論を体系的に精緻化して提示することに成功したわけではない。その後は批判も相次いだ。小田氏はしかし、マンハイム理論にみられる曖昧さにこそ、いくつかの重要な論点が隠されていると考え、そこに新たな可能性をみる。マンハイム以降に展開される批判理論および社会理論を踏まえて、学説上の整合性や接続可能性を、内在的な観点から丹念に検討している点に、本論文の大きな貢献がある。

中心的に検討されるのは、認識の客観性である。客観的な事実とは、人々のあいだで成り立つ関係的な事実であるとして、しかしそれは複数の集団において多様に立てられる場合がある。社会的分化の進展とともに、分化したそれぞれの集団ごとに「事実なるもの」が異なって措定される場合、その分裂を調停する可能性は、さまざまな視野の「共約可能性」に求められる、というのが小田氏のマンハイム解釈における重要な論点である。さらに小田氏は、マンハイムにおいては、集団ごとに事実の措定が分化したり、あるいは一致する際の条件が、どのように生み出されるのかが明らかではないとして、この問題を社会現象学のシュッツ、バーガー／ラックマン、そしてこの系譜を継承する知識社会学者のケラーの知的貢献を参照しつつ、マンハイムの理論を補完している。加えて、社会学的時代診断学という議論を、ホーリスティックな知識理論という枠組みにおいて再定義し、マンハイム理論の現代化を図っている。

第一章では、マンハイムの「存在拘束性」の理論において、認識の個体性が生じるのは、各人の「体験の流れ」や具体的な社会関係における各人の位置の差異によ

ることが明らかにされる。そして各人がその存在を変化させる行為論的可能性が、ケラーの知識社会学において展開されていることが跡づけられる。

第二章では、マンハイムのいう「客観性」と「関係主義」の関係が検討されている。氏はこの文脈で、認識の社会性と視座性を指摘し、この二つの特徴が、民主的・公共的な討議の可能性を有意義に位置づけるものであると指摘する。さらに、このマンハイムの理論に、反省性(reflexivity)の概念を接続することで、マンハイムの理論が現代に通用しうる知的資源であることを明らかにしている。

第三章は、「知識と存在の二元論」を精査して、一方では「存在」をホーリズムの観点から知識のレベルに回収しつつ、他方では「知識」の重層的な構造を明らかにすることで、マンハイムの方法論を現代にも通用する仕方で位置づけ直している。

第四章は、ドイツの社会理論家、ベックに代表される時代診断学の理論的達成を整理しつつ、その中にマンハイムの貢献を位置づける一方、従来のマンハイム評価を超えて、「診断」の概念を重層的に解釈することで、マンハイムの学問的意義を新たに提起している。時代診断学は、その都度の社会状況において、新しい解釈視座を提起する一方、古い解釈視座を批判する。この批判とオルタナティブの提起は、私たちの知のパラダイム転換を担う役割や、公共的な議論を活性化する機能をもつ。かかる役割を果たす点に時代診断学の意義を改めて位置づけ、その知的資源の１人としてマンハイムの貢献を再解釈している。

第五章は、現代の社会学者ケラーの「知識社会学的言説分析」に焦点を当てて、その理論とアプローチを紹介するとともに、ケラーとマンハイムの違いを比較考察している。ケラーは、「知識」と「存在」の二元論をいかにして克服するかという問題に拘泥せず、知識よりも言説に焦点を当て、その生成と変動を分析する研究プログラムを構築した点に新しい達成がある。本章ではその方法論を検討し、時代診断学の新たな可能性を探っている。

この最後のテーマは、本研究では十分に展開されたとは言えないが、現代においてマンハイムの時代診断学を評価・応用する際には、不可欠な検討であるといえる。本研究によって、マンハイムの知的貢献に新たな精緻化と再規定が加えられたことは、社会科学の諸学とりわけ理論分野の研究にとって、きわめて水準の高い重要な貢献をなしていると評価することができる。

論文の題名が外国語の場合には，日本語訳を（　）を付して記入すること。
要旨は，２，０００字以内にまとめること。